

賀名生に伝わる鬼面駄鈴

伊藤 純

はじめに

奈良県五條市賀名生の旧家・堀家に後醍醐天皇から下賜されたと伝えられる「駄鈴」がある。現在この駄鈴は〈五條市賀名生の里 歴史民俗資料館〉に寄託、展示されている。

まずはこの駄鈴を紹介した文献を見ることとする。

一九二三年（大正一二）

『奈良県吉野郡史料』下巻（三七七〜七八頁）

賀名生行宮跡

家（堀家）に延元（一三三六〜四〇）正平（一三四六

〜七〇）の際、帝より賜はる御物を蔵せり。

一、三社御神号御旗

一、日章旗（共に集古十種旌旗部に出づ）

一、鷹羽印旗 同

一、御笛（一節切尺八以堆朱画飛竜）

一、駄鈴

一、陣鐘（此も集古十種に出づ）

一、御物短刀（明治六年宮内省に献上し目録を拝受す）

其他、尚蔵するものもあるも略す。

一九三八年（昭和一三）

杉本保弘『史蹟と名勝 賀名生巡礼』（三〇頁）

賀名生の行宮、和田堀家

当家には宝物として三社神号の御旗、日章旗、鷹生羽

違旗、御笛、駅鈴、梵鐘などを代々受け継いでいる。

一九六三年（昭和三八）『西吉野村史』（六一七頁）

堀家にはいろいろな宝物があるが、金石文関係では隆慶六年（中国明代一五七二年）の馬牌や、天慶二年（九三九）の刻銘のある駅鈴があるがまだ研究の余地はある。

なお『賀名生村史』（一九五九年）は、堀家の宝物を紹介しているが、駅鈴についての記述はない。

このように、堀家伝来の品々の中に駅鈴があるといった文字のみ報告で、写真や図は掲載されていない。

管見によれば、この駅鈴は小笠原彰「駅鈴 えきれい」（五條の歴史を探る 九一回 『広報五條』八〇九号 二〇一六年三月）で「後醍醐天皇の下賜品と伝わる駅鈴」のタイトルで小さな写真、歴史民俗資料館のパンフレットでも小さな写真が掲載されているのみと思われる。

したがって、この駅鈴（駅鈴と呼ぶのが正確か否かは

別にして、これまで「駅鈴」とされてきたので駅鈴の用語を用いる）の真上からの写真、計測値だけでも報告する意味はあると思ひ、小文を草する次第である。

賀名生駅鈴の事実

全長二・九 cm、鈴の部分の幅（左右）は一・一 cm、鈴部分の厚さは六・二 cm。

鈴の部分には鬼のような顔が凸線で見られる。後段で類品を見ていくが、鬼面駅鈴と呼ばれているものに酷似している。断面円形の握りの部分の上端にはぐるりと一周する三本の凹線、下端にも浅いが一週する三本の凹線が施される。上端・下端の凹線は、鋳造品として出来上がった後に、鑿で刻まれた線刻ではない。製作途上、鑄型の段階で準備され、熔けた金属が鑄込まれ、凹線となつたものである。

鬼面が表現された反対側（裏面）には文字が刻まれている。

天慶二 己亥 年

三月十一日



この文字は本体完成後に刻まれたものである。極めて浅い彫りで、注意深く観察しないと読み取れない。

以上、私が見し、認識できた事実である。資料紹介なので右記の事実を提示し、これで報文終了もありうるが、観察を通じ、あるいは世に紹介されている類品を見るにつけ、思い浮かぶことも生じたので、駄文を続けたい。

裏面に刻まれた文字

裏面の文字は、本体が完成された後に刻まれて（施されて）いることは間違いない事実である。本体完成直後、間をおかずにこの文字が刻まれたならば、この駅鈴は天慶二年（九三九）、朱雀天皇の時代に鑄造されたと判断できる。しかし、彫られている線は非常に浅く、注意深く観察しないと「天慶二己亥年 三月十一日」は読み取れない。相当な照明をしないと、撮影できないほどの浅い線刻である。充分な機材を準備していなかった私は、この線刻文字を撮影できなかった。

本体の駅鈴にとって「天慶二己亥年 三月十一日」が

重要かつ不可分の内容ならば、もつとしっかりと鑿を打ち込むはずである。あるいは本体完成後の追刻という方法ではなく、鑄型の段階で文字の準備もできたはずである。

この文字は本体完成後に刻まれた文字なので、理屈の上では文字が刻まれたのは一〇年後でも、一〇〇年後、極端に言えば数百年後に刻まれたのかもしれない。

このような見方から、天慶二年（九三九）という年紀と、駅鈴の製作時期を切り離して考えてみたい。

天慶二年（九三九）三月のできごと

天慶という年号で思い浮かぶのは、「平将門の乱」である。「将門記」によれば、武蔵国庁で検注をめぐり、着任予定の国司と郡司の対立が生じた。この事態に対して平将門は武蔵国庁の紛争を調停するために出兵し、国司権守・興世王おきよおうと郡司・武蔵武芝むさしのむらを和解させた。しかし、国司側のひとり源経基みなもとつねもとはこのような状況を疑い、上洛し平将門らの謀叛の疑いを朝廷・太政官に奏上した。「平将門の乱」の一連の過程で画期となる源経基の

行動は天慶二年三月のことである。経基が太政官へ謀叛の疑いを奏上した日付は不明であるが、直前の記事は二月二十九日、経基奏上後の記事は三月二十五日である。駅鈴の裏面に追刻された「三月十一日」は二月二十九日から三月二十五日に挟まれた日付である。(東洋文庫『将門記』一三〇五―二〇頁)

南朝の正史ともいべき『神皇正統記』では「平将門の乱」について六一代朱雀天皇の記述の中で

此御時、平の将門と云物あり。上総介高望たかもちが孫也。執政の家につかうまつりけるが、使の宣旨せんじを望申けり。不許なるによりいきどをりをなし、東国に下向して叛逆をおこしけり。(日本古典文学大系87『神皇正統記 増鏡』一三〇頁)

と、平将門を逆賊としている。

南朝・後醍醐天皇から下賜されたと伝わる駅鈴の裏面に、南朝側が逆賊と認識し、乱の画期となった日付「天慶二己亥年 三月十一日」が追刻されているのは、地元

賀名生の南朝に心を寄せていた後世の人が、南朝を顕彰するために心覚えに刻んだものではなかるうかと私は想像する。

しかし、これは私の思い付きで、とうてい実証することはできない。

世に紹介されている鬼面駅鈴

近世の書物の中で、絵図として紹介されている鬼面駅鈴の類品を見ていきたい。賀名生の駅鈴との比較を容易にするため、紹介文献の記述からおおよそ三分一の縮尺にしたものを作成してみた。

- ①賀名生駅鈴 全長二九・三 cm
- ②鹿島神宮正等寺『集古十種』(一八〇〇年) 全長約三三・三 cm (一尺一寸)
- ③佐竹家蔵『集古十種』(二八〇〇年) 全長約二八・三 cm (集古十種に二分一の図あり)
- ④伊勢神宮『栗里先生雑著』卷三(一八八四年) 残存長約二〇・二 cm (六寸六分五厘)

この図の説明「この図は下野国都賀郡木村の民淵名

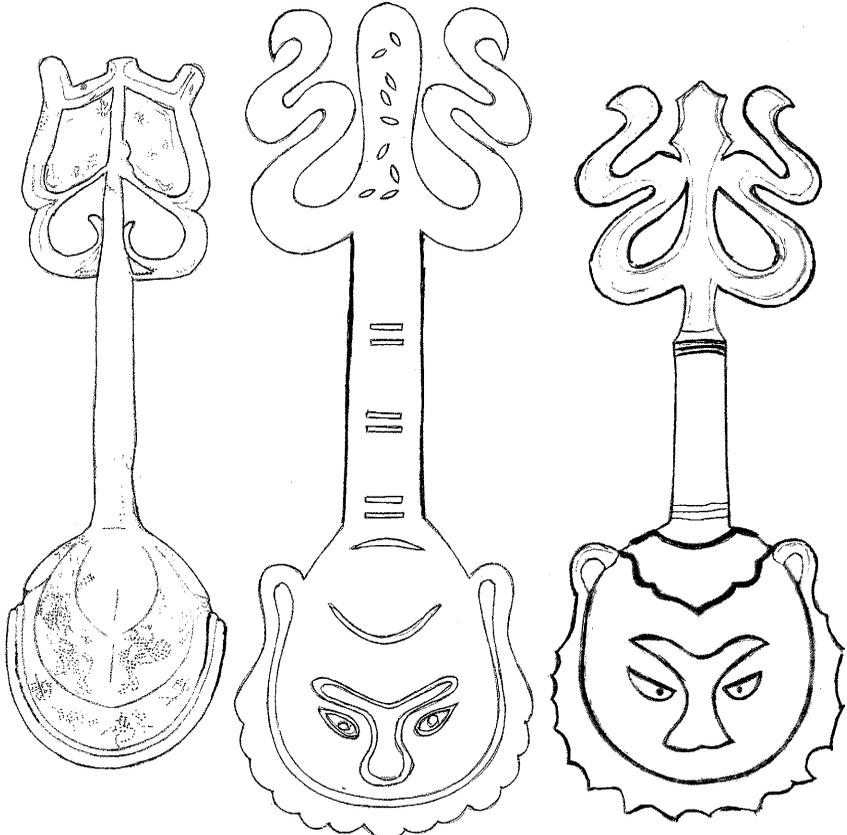
太郎左衛門所伝のものを、我
水戸市木村伝六の家に蔵せる
を写しとれる也。今は伊勢神
宮に納めたり」とある。

⑤下総国吾嬬神社「駅路鈴考」
(一七八四年) 大きさと不明

このように賀名生の駅鈴と似た
ものが江戸時代から報告されてお
り、賀名生の例が孤立した特異な
ものではないことが分かる。

鬼面駅鈴偽作説

世にいくつか知られる鬼面駅鈴
について、これらを偽作とする説
も当然ながら公表されている。



③佐竹家

②正等寺

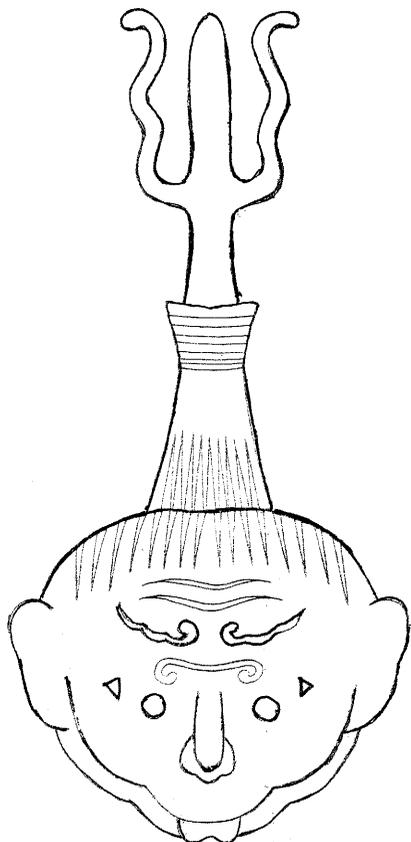
①賀名生

樋畑雪湖『日本駄鈴論』（国際交通文化協会 一九三九年 三〇）

三七頁）

鬼面鈴

常陸鹿島神社の神宝、及武州吾嬬神社の神宝として存在するその類のもので、伊勢貞丈の紹介以来、一般に古駄鈴として許されたものである。しかし著者は之を単なる鈴鈴と見て、断じて駄鈴ではないことを主張する。貞丈が、駄鈴の剋数なりと認められた柄の横線は、鈴鐸鈴杵の刻みに過ぎないもので、考量すべき何等の価値もない。…（中略）
 …当時の模造と認むべき幾多大同小異の類似品、即ち此の種の鬼面鈴なるものが、続々として各地に遺存するを見る。



⑤吾嬬神社



④伊勢神宮

總長六寸九分五厘
鉄丸徑七分五厘

フアヘ折
タカサミ

ツノ刺數五ツアリ

柄長三寸三分徑九分五厘

胴長三寸三分五厘横三寸三分

滝川政次郎『出雲・隠岐』（平凡社 一九六三年 四九七頁）

駅鈴伝符考

伊勢貞丈の『駅路鈴考』一たび世に出るや、鬼面鈴即ち柄のついた鈴が真の駅鈴であるということになって、その偽物も所々方々で造られた。その偽物を買求めた人の子孫は、これを家宝として伝えていたが、かかる珍宝は、私すべきでないという殊勝な気持ちを感じて、これを伊勢太神宮に献じた人がある。私はその鬼面鈴を大神宮の宝庫で見したが、その添札には、この駅鈴は、我家に往古より伝わる重宝である旨がしるされてあった。また私は、後村上天皇の行在所に充てられたという伝承をもつ、大和国吉野郡賀名生府の旧家堀氏の宅でも、駅鈴と称する鬼面鈴を見せられた。その鈴の面には、「延喜七年」の陰刻がいたずらさされていて、明らかに江戸時代の偽作品であることを露呈している。明和（一七六四～七二）、天明（一七八一～八九）以後における江戸時代の社会は、こうした偽物がたくさん造られた時代である。

樋畑氏、滝川氏とも鬼面駅鈴について偽物と断じている。両氏とも伊勢貞丈が「駅路鈴考」（一七八四年）において②鹿島神宮正等寺、⑤下総国吾嬬神社の鬼面駅鈴を真物と判断したことによって、類似する偽物が作られたとする。滝川氏は賀名生の駅鈴を見ていたようだが、「天慶二己亥年 三月十一日」を「延喜七年」と読んでいる。

私には賀名生の例も含めて鬼面駅鈴を真物・偽物と即断する材料、知識を持ち合わせていないので、次に先人の見解を見ていくこととする。

鬼面駅鈴に言及する史料

A一一九四年（建久五）の記述『扶桑見聞私記』（大阪府立中之島図書館蔵）

一二月二五日

駅路の鈴の事、所出を不知。神代より相承ありし駅路の鈴と云は、何れの御代よりか鹿嶋明神の宝前に有奉納。其形似柄香炉、其音高し。昔は賜彼鈴、朝敵退治の人持参し、収彼鈴、軍兵を指揮しけると云り。彼鈴

は能悪魔を降伏すと也。

B 一七〇四年（宝永元） 谷重遠『新廬面命』（少年必読

日本文庫 四編 三九頁）

三月二日

鈴は只今の道中御朱印と同じ。伝馬を此鈴にて出すに
より、駅路の鈴と申候。鹿島の神宝に伝はり有之也。

C 一七七五年（安永四） 大田南畝『一話一言』卷五

（日本随筆大成 別巻一 一三三～三四頁）

常陸国鹿島郡正等寺に駅路鈴あり。林祭酒（信智）

（林述齋一七六八～一八四二）の記せる文あり。其図
左の如し。（図あり）

羽倉在満（荷田在満一七〇六～五一）がみたる所とは
大きに異なるものなり。

D 一七七七年（安永六） 谷川士清『倭訓栞』（増補語林

倭訓栞 上巻 三一八頁）

えきろのすず 駅路の鈴也。禁秘抄に、或は六角、或

は八角と見ゆ。…（中略）…世に称する所のものは西
土の虎撐也といへり。鹿島神宮に蔵す物は実形也。

E 一七七八年（安永七） 小栗百万『屠龍工随筆』（続日

本随筆大成 九 三五頁）

駅路の鈴は、將軍のうつての使にむかふ時、節刀に添
へて給はるなり。末の代に至て、むかしの例も知れざ
ればとて、唯御鈴給ひけりと平家物語に見え、禁秘御
抄に、彼鈴八角六角とあるものとぞ載させ給へるに、
常陸鹿島の御宝殿に籠たる所のものを、絵にうつした
るを見しに、長さ六寸許にて、頭は鰐口の歯をむき出
したるが如く、をそろしき目鼻ありて、鬼の手のごと
くなるもの二本ありて、頭の脇に持べきとおもふ所は
巫女のふる鈴の柄のごとくにのびて、末は又尾のごと
くなる二つに別、早わらびの様にきりきりと巻て、兩
方共に外の方へ向たる八角やらん六角やらん絵なれ
ば、しかと別れざれども、鉄にて作りたる物にや墨に
て黒くぬりたる。その色の黒きものとはおもはるるか
し。

F 一七八四年（天明四） 伊勢貞丈「駄路鈴考」（新訂増補故実叢書『安斎隨筆 第二』三一六頁）

下総国葛飾郡吾嬭神祠と常陸国鹿嶋郡正等寺と此両処に蔵する者、其制形大に同くして少しく異也。其の形状おなまじやくし蝌蚪こびりの後脚を生じたらんが如くにて、其の背腹に眼耳鼻口ありて鬼面に似たり。其の柄に剋数と謂ふべき者あり。其の體、吾が朝の人の意巧より出つべき者とは見えず。思ふに上古吾が朝家の制度・儀物、唐朝を模擬せられしかば、駄鈴も亦唐制を模せられしにや。彼の両鈴、共に大に同じけれども、少しく異なる所あるは、造作の時世にも依る歟。古き官家の文書を見るに、天子の御印を捺したるあり。其の文字、天皇御璽の字様、曲直肥瘦少異あり。官印亦然り。是れ時世に依りて少異ある也。彼の両鈴の少異も亦其の類歟。彼の鈴、剋数と謂ふべき者あれば、是れ其の真物にもやあるらん。左の図の如し。（図2枚はいる）

G 一七八六年（天明六） 諦忍『空華談叢』卷一（大日本仏教全書 一四九冊 三九〇～九一頁）

駄路の鈴

今の世には、其器絶て無して僅に存す。常州鹿嶋郡正等寺に現存す。其形勁正にして、其製朴古なり。今之を示さん。（図あり）

H 一八〇九年（文政六） 石上宣統『卯花園漫録』卷四（日本隨筆大成 二期―二三 一八三頁）

常陸鹿島正等寺所蔵、駄路銀といふもの、空華談叢に出たり。此物いにしへに云ふ駄路の鈴なりや。（図あり）

I 一八二九年（文政一二） 橘南溪『北窓瑣談』（日本隨筆大成 二期―一五 二三〇頁）

常陸国鹿島の神庫にも、駄路鈴ありとて、其絵図をみたりしに、山伏の持てる錫杖の形のごとく長き物なりし。異製の鈴にや。また天明年間（一七八一～八九）、河内国より掘出したりとて、青き銅の鶏の形したる鈴、京へ持登りて売し人の有けるに、並河氏、伏見の宮に御覽に入奉りしに、是は我家に無くて叶はざるも

のとて、価を下されて召れしとぞ。並河氏後に物語なりき。宮には何の御用にか有らん。

丁一八二九年（文政一二） 茅原虚斎『茅窓漫録』上

（日本随筆大成 一期—二二—二五頁）

駅路鈴

駅路鈴は、常陸国鹿島明神正等寺の什物にして、其長
壹尺壹分（約三三・三cm）、耳目口鼻皆具る。形甚奇
雅なり。又河内（丹北郡長原村）日蔭明神（現・志紀
長吉神社）の宝物にもありしが、今は同地丹上郷弥五
郎が家に秘蔵せり。その形、鹿島のものとは、少々異
なる所ありて、面目見え兼るといふ。駅路鈴は、古き
書にも数多見えて、鹿島に伝ふるものは、扶桑見聞私
記、（第六十一）建久五年（一一九四）十二月下に大
庭景義曰駅路鈴の事出る所をしらず。神代より相承あ
りし駅路鈴といふは、何れの御代よりか、鹿島神の宝
前に奉納あり。其形、柄香炉に似て、其音たかし。…
（中略）…今按ずるに、駅路鈴と名付るもの三種あり。
鹿島・日蔭両社に伝るものは、神代より相承ありし、

其所謂詳ならず。一説に、是は鬼面鈴なりともいふ。

K一八三四年（天保五） 穂井田忠友『高ねおろし』上

（百家随筆 第二 四四〇頁）

駅鈴

鹿島正等寺所蔵の鈴とて、其図を標出して奇雅也と称
揚したるは、世間に古鈴の多きを不知故なれど、是等
の鈍物一品、仮令其鈴を獲たりとも、世に誇るべき程
の事かは、井鮒の揺鱒一嘘すべし。

L一八四八年（嘉永元） 栗原信充『柳庵雜筆』卷二

（日本随筆大成 三期—三 四〇九頁）

葛飾の吾孀森の神社の神宝なる鈴や、常陸国鹿島正等
寺の古鈴などを、駅鈴なりと云は如何あるべき。

M一八八四年（明治一七）『栗里先生雜著』卷三（九二

頁）

一代一度奉幣の社の考（附駅路鈴の事）

駅鈴の體は、下総葛飾郡吾孀神社の蔵持、常陸鹿島郡

正等寺の蔵持に、剋数ともいふべき筋を彫たるあり。
これ真の古物なるべくや。

賛成できない。

まとめにかえて

N一八九八年(明治三一) 黒川真道「駅路鈴の説」『考古学会雑誌』二一八(二九六頁)

第一図(正等寺)の種類には、柄に剋数の如きものありて、古人も既に剋数ならんとの説あれども、果して剋数なりやおぼつかなし。

Aの『扶桑見聞私記』(一一九四年)は偽書とする見解もあるので、ここでは除外することとする。

これら先人の記述を見ると、現に存在している鹿島正等寺などの鬼面駅鈴について、真物とする見解(B・D・F・G・H・M)がある。一方、偽物と断じる見解(K・N)もある。また、こういう物があるといった事実を紹介する記述(C・E・I・J・L)もある。

滝川氏は明和(一七六四〜七二)、天明(一七八一〜八九)以後に偽物が作られたと述べているが、鬼面駅鈴すべてを江戸後期に偽作されたものと断ずることに私は

賀名生に伝わる鬼面駅鈴を紹介し、加えて裏面に追刻された文字「天慶二己亥年 三月十一日」について推論を述べてみた。私の目的は、賀名生の駅鈴について客観的事実を紹介し、共有知識とすることである。

したがって、賀名生の駅鈴が伝承のとおり後醍醐天皇から下賜されたものかどうかについて判断を下すことが小文の目的ではない。とは言うものの、いささか思うところ、蛇足を綴ることを許されたい。

後醍醐は政争の中にあつて一三三二年(元弘二)四月二日、隠岐に流された。後醍醐の隠岐での所在地について『増鏡』には

海づらよりはすこし入たる国分寺といふ寺を、よろしきさまにとり拂いて、おはしまし所に定む。(日本古典文学大系87『神皇正統記 増鏡』四六五頁)

とあり、鳥後の国分寺が行在所だった。鳥後の玉若酢命神社には古代のモノとされる駅鈴が伝わっている。玉若酢命神社と後醍醐の居た国分寺は僅かな距離である。後醍醐は寺社に伝わる古物・宝物について大いなる興味を抱いていたことも明らかにされている（坂口太郎「後醍醐天皇の寺社重宝蒐集について」『鎌倉時代の権力と制度』二〇〇八年）。後醍醐は国分寺から程近い玉若酢命神社に向向っていたはずである。そこで古代律令時代モノと伝わる駅鈴を後醍醐は見たのであろう。（隠岐の駅鈴は古代のモノか否かについては議論がある。私の想像する脈絡では後醍醐の時代に玉若酢命神社に駅鈴が存在していたことになる。）駅鈴は朝廷と地方を直接的に結び付けるモノである。新たな国家像を懐いていた後醍醐は、かつての世で朝廷と地方とを結びつけた駅鈴が存在しているという事実を隠岐の地で知ったのであろう。このことが自ら樹立した新たな政権において、朝廷と地方を結ぶモノ・駅鈴を作り、地方に配布したのではなからうか。そして、その形は、自らが信仰する真言密教の儀式で用いる法具のデザインを取り入れたのではなからうか。

これは私の大いなる想像で、とうてい実証することはできない。黙殺されるような妄想である。賀名生の駅鈴の計測値、観察した事実、写真、図が共有されることが私の唯一、最大の目的であることを改めて述べておく。

最後になりましたが、家宝の駅鈴の調査、写真撮影を許可して下さいました堀家ご当主・堀丈太様、駅鈴の実見にあたりご高配を賜った歴史民俗資料館・館長鍵本理恵氏、五條市教育委員会・学芸員山本望実氏に深謝いたします。

追記

二〇二一年一月二八日、玉若酢命神社を訪れた。その際、神社億岐家の方から、九州歴史資料館が行った隠岐国駅鈴の成分分析の結果について教えていただいた。それによれば、駅鈴の金属成分は、正倉院の青銅鏡や法隆寺の仏具の事例と同様で、奈良時代に造られたと判断できるとのこと。後醍醐の存命中に隠岐国駅鈴が存在していたことが確実になった。